

つづらごとを附記してきた。

(Hamilton A. R. Gibb; *Studies on the Civilization of Islam*, Edited by S. J. Shaw and W. R. Polk, Routledge & Kegan Paul Ltd. London. 1962. 369 ps.)

ローベルト・ゲーベル著

スルフ・コタル出土カニシユカ碑文の 三原文

辻直四郎

スルフ・コタル出土のいわゆるカニシユカ碑文が、大同小異の三原文によつて代表されるのは、今や周知の事実である。すなわち最初(一九五七年五月)に発見されたM(Onolith, A. Maricq JA 1958, p. 352, E. Benveniste JA 1961, p. 115—6)と、一九五八年十一月—一九五九年十一月の間に発見された石片五十三個を接合して復元されたA(二十一片)とB(三十二片)とを指す(Benveniste op. cit. p. 117—131)。資料の増加は、この重要な碑文の研究に多くの示唆を与えると同時に、複雑な問題を提起した。バンヴニストは主として碑文の最後の部分の広略を基準とし、人名を挙げるこ

と最も少く、従つて最も簡略なものを先頭に置き、A・B・Mの順序を推定し、順次に置き代へられたものと見なした(op. cit. p. 132—140)。すなわちAは碑文に述べられる出来事(Nokonzokoの事蹟、op. cit. p. 116)の直後のもので、一個の署名を含む。Bは神殿の第一修復後のもので、Aの内容を再録しつつ、関係した高官の名を追加している。第二修復に際してAとBとは、井戸の壁の構築に利用されたが、新たにMが作られ、再び当初の出来事を記録し、かつ神殿ならびに井戸の修理に関係したすべての人の名を列挙して、これを後世に伝えるため、全文を注意深く一枚の石に彫り、正面外側の生煉瓦の壁に填めこんだ(ibid. p. 140)。

これに対しD. Schlumbergerは、AとBとの発見された情況から判じて、両者が同時に廃棄されかつ同時に井戸壁に利用されたと見る方が自然であると指摘し、バンヴニストの説に修正を加えた。彼はAとBとの並存時期を仮定し、なお未解決の問題の残ることを認めつつも、碑文から見た神殿の歴史を次の三期に分ける。すなわち、一、神殿の建立者カニシユカ王の時期。二、Nokonzokoによる第一修復(碑文の挙げる)井戸と基底台地(La terrasse de base)との建設を含み、AとBとはこれを記念する。三、第二修復、AとBとが在った壁の破壊、その結果生じた材料による井戸壁の修復、Mを制作し基底台地の正面に設置。最後に基底中央階

段と南北古地との間の狭い通路 ('les rampes') の建設 (JA 1964, p. 321—2)。

クシヤーナ朝貨幣の研究者として知られる本書の著者 R・ダーネル博士は、ハンズウィーストの見解を Makulaturtheorie と呼び、直接写真に基づいて技術的配慮の下に A と B とを正確に復元し、碑銘学・古文字学的見地から三原文の相連を精密に検討し、A も B も M に到達するための草案・試作と目されるべきもので、その制作順序は B・A・M であると主張している (I. Einleitung: § 1—11)。

次で (II. Die Texte: § 12—18) 著者は A (§ 13, cf. Tafel I; Tf. XIV, XV) 4 (§ 15, cf. Tf. II; Tf. XVI, XVII) を含む M (§ 17, cf. Tf. III; Tf. XIII) に対し、碑銘学・古文字学的に詳細な解説を附し、特に一節を設けて碑文の末尾に見えるモノグラムの問題を論じている (§ 18)。A を含む M では AMOPAMANO または AMITPAMANO を両側から読む二個のモノグラムの中、向うて左のものとして *AEIOO* (= HUMBACH) と分解する可能性を認め、向うて右のものは、上から読み更の下から読むは YAPOY (cf. *uzpouyo* 'Hirtē' HUMBACH) となるとしている (: MIYPO HUMBACH: Die Kaniška-Inschrift § 4)。両モノグラムは王室または神聖な領野に属するもので、今後の解釈の方向は、これから出発すべきで、個人名および個人の

モノグラムから出発すべきではないと結論している。

著者は個々の原文を厳密に検討した後、三原文の相応箇所を上二三段に並べて、その異同を一目瞭然たらしめた (III. Die Synopse B—A—M: § 19—20, Tf. IV—VI)。語の切れ目は、ハンズウィーストの Edition synoptique des trois textes (JA 1961, p. 133—6) とほとんど同一であるが、一層正確な解説に基づいているから、今後この碑文を研究する者に、最も便利でかつ最も信頼すべき撮要を提供したものと
言う得る。

次に (IV. Paläographische Untersuchungen der drei Versionen: § 21—24, Tf. VII—XII) では、著者は三原文中に現われる各文字のあらゆる用例を集め、文字ごと B・A・M の順に一括して表示した。各原文中における各文字の変形を示すばかりでなく、著者の解説と相まって、三原文相互の間に見られる字形発展の跡を、おぼろげに知らしめる。著者はこれにより、字形の上から見ても、制作の過程として B・A・M の順序が認められると主張している。また著者が連結文字 (Ligaturen) の使用に留意し、その頻度が B において非常に高く、A では皆無、M ではただ一回だけあると指摘したことは注目値じする (p. 19, Tf. XII)。

著者は以上を総括し (V. Zusammenfassung: § 25—35) 古文字学の上から見て三原文は、時代を異にするものではない

いと断じ、Bの文字は稚拙にして丸型に傾き、Aのそれは生硬にして一般に角型に傾き、Mは兩型を適度に混用してよく均勢を保つと述べている。AとMとを個々に見れば、各々一人の手に成つたものといえるが、この兩者を同一人と見なすことも可能であるとし、これに反しBは全く別人の手に成つたものとしている (§25)。著者に従えば、制作上の諸傾向、材料等の考察もすべてB・A・Mの順序を支持し、未完成のBも、完成されてはいるがMより短いAも、かつて公式の碑文として建立されたとは考えられない (§26—35)。三原文は連続的ではあるが同時の制作にかかり、BもAもMに到達するための準備に過ぎず、その目的を果した後は石片として任意の場所に利用された。Mのみが最終にして唯一の公式カニシユカ碑文である (§35)。

著者は最後に附録の形で、碑文自身が含む日附すなわち(カニシユカ紀元)三十一年 Nisan 月に関連し、カニシユカ紀元の初年の問題、碑文はいずれのカニシユカに属するか、もしカニシユカ一世に属するならば、彼は建立当時なお生存していたかの問題を提起する (VI. Exkurs: Die historische Einbettung der Inschrift: §36)。

カニシユカの年代につき独特の見解をもつ著者は、カニシユカ紀元の始めを西紀H225或いはH230とし (p. 23 cum nn. 26, 27) 、「この碑文はカニシユカ一世に属するものと断

定している。貨幣の研究とクシャーナ朝の王位継承の考証に基づき、本碑文は西紀+260/61年、カニシユカ一世の存命中に制作されたものと論じている。

注一 本書二三頁注二七に引用された A. D. H. Bivar: *The Kaniska dating from Surkh Kotai, BSOAS* 26 (1963), p. 498—502 において、その著者はむしろ 'Olds aka' または 'Indo-Bactrian' Era の始めを西紀前155年とし、これに基づいてカニシユカ紀元の始めを西紀120/24年とする。従つて、カニシユカ紀元三十一年は西紀150/154年に該当する。

ゲーベル博士の精密な研究の最も重要な成果は、三原文の正確なテキストを提供した点にある。パンヴニストの年代序列説に対する同時習作説にも傾聴すべき点がある。BはたしかにAおよびMとは異なる印象を与え、全般的に粗雑な未完成品の觀を呈する。著者が指摘したごとく (p. 22) 、「冒頭に近く、KANHPKI (= Kaniska) を KANHPHPKI と誤記していることは、習作説により最も簡単に説明される。これに反しAは、末尾の人名を省略しているとはいえず、一個の完成品たるを失わず、単に習作説のみで説明しきれるか否か疑問をもつ。いずれにせよこの方面の将来の研究が、ここに提示されたテキストを出発点とすることに疑いはなく、この碑文のみならず同種の言語をもつて書かれた貨幣の銘文或いは

碑文断片の研究者は、著しく著者の労を多しとせしむるに相違なき。

Robert Göbl: Die drei Versionen der Kaniska-Inschrift von Surkh Kotal. Neuedition der Texte auf verbesserter technisch-epigraphischer und paläographischer Basis. Österreichische Akademie der Wissenschaften, phil.-histor. Klasse, Denkschriften, 88. Band, 1. Abhandlung. Wien (Hermann Böhlau Nachf.) 1965. 20×30 cm., 24 pp. 17 pl.)

後記

日本では少数の専門家を除き、一般には広く知られていない恐れがあるから、以下の重複な碑文に關する主要文献を列挙し、問題の所在を指摘して参考を供する。直接手とすることが出来なかつた論文も若干あるが、その存在の確かなものはない。

1 主要文献

- ◀ Délégation archéologique française en Afghanistan 及び Surkh Kotal の経歴並に略記。
- Schlumberger, Daniel: La découverte en Bactriane d'un temple d'époque kouchâne. CRAI 1953, p. 30-33.
- Note sur la deuxième campagne des fouilles de

Surkh Kotal en Bactriane. ib. 1954, p. 107-108. —
Note sur la troisième campagne des fouilles de S. K. en Bactriane. ib. 1955, p. 64-71. — Les fouilles de S. K. en Bactriane (IV^e, V^e, VI^e campagnes). ib. 1957, p. 176-181. — ib. 1961, p. 205-209. — ib. 1963, p. 68-71.

do. : Le temple de Surkh Kotal en Bactriane. JA 1952, p. 433-453. — (II) ib. 1954, p. 161-187. — (III) ib. 1955, p. 269-279. — (IV) ib. 1964, p. 303-326.

do. : Surkh Kotal, a late Hellenistic temple in Bactria. Archaeology VI (1953), p. 232-238. — S. K. in Bactria. ib. VIII (1955), p. 82-87.

do. : Surkh Kotal: Un sanctuaire du feu d'époque kouchane en Bactriane. Arts asiatiques 1 (1954), p. 132-138.

do. : Surkh Kotal. Antiquity 33 (1959), p. 81-86.
do. : The excavations at Surkh Kotal and the problem of Hellenism in Bactria and India. Proc. Brit. Ac. 47 (1961), p. 77-95. ^②

Curjel, Raoul: Inscriptions de Surkh Kotal. JA 1954, p. 189-205. 碑文断片の古文字学的研究。カニシユカ碑文以外の断片については、A. Mariq JA 1958, p. 414-7 (Autres

inscriptions de S.K.), H. Humbach: Die Kanisška-Inscr. von S.K. (1960), p. 59 (Anhang II: Verzeichnis der Fragmente), E. Benveniste JA 1961, p. 141-152 (Nouveaux fragments de l'inscription pariétale), Schlumberger JA 1964, p. 303, p. 309 参照。

Henning, W.B.: 'Surkh Kotal', BSOAS 18 (1956), p. 366-7. いわゆる Palamedes 碑文の第二行に見える *BALOMAITTO* を *Baylān* (Baghlān) と一致させ、*baga-dānaka- 'temple, altar, sanctuary' と解した。

Anboyer, J.: Les travaux archéologiques français en Afghanistan, dans l'Inde et au Cambodge (au cours des dernières années). Indologen-Tagung 1959 (Göttingen 1960), p. 122-138, v. p. 122-7 (Afghanistan. I. Surkh Kotal).

Jettmar, Karl: Zum Heiligtum von Surkh Kotal. CAJ 5 (1959), p. 198-205.

Harmatta, J.: Cusanaica. Acta Orient. Hung. 11 (1961), p. 191-220. カニシカ碑文発見前の資料による。特に Palamedes 碑文に関して p. 192-6 参照。

Göbl, Robert: Beiträge zur Ikonographie der Kusān-könige: Huviška. CAJ 8 (1963), p. 135-142. p. 特に 141-2: Die Statue des Huviška (?) von Surkh

Kotal 参照。^④

n. 1. これより先、最初の報告は R. Dussaud によってなされた (CRAI 1952, p. 225-7)。

n. 2. この発掘の指揮者 Schlumberger の報告は他にもあるが未見、e.g. Fasi Archaeologica, Firenze, VII (1952), 1954 (cf. Proc. Brit. Ac. 47, p. 94, n. 5); Neue Ausgrabungen im Nahen Osten, Mitteleuropa und in Deutschland (Koldewey-Gesellschaft, Regensburg 1957), p. 23ff. (cf. Mayrhofer ZDMG 112 (1962), p. 325, n. 2). なお美術史的問題に関して、D. Schlumberger: Descendants non-méditerranéens de l'art grec. Syria 37 (1960), p. 131-166, p. 253-318, 特に I, 3: Art gréco-iranien et arts de l'Inde poudhique: Surkh Kotal et le Gandhara, etc. 参照。

n. 3. F. Altheim-R. Südel の見解については p. 193-4 (cum n. 6) 参照。

n. 4. p. 135, n. 1 に引用されている Charles M. Kieffer: Kusana art and historic effgies of Mat (India) and Surkh Kotal (Afghanistan), Marg 15 (March, 1962), no. 2, p. 43 f. は特に Mathura に関するといふ。

- 四 54596-61919 大蔵大臣鑑(イ)。
 Schlumberger, Daniel: *Les fouilles de Surkh Kotal en Bactriane (IV^e, V^e, VI^e campagnes)*. CRAI 1957, p. 176-181. 特に第六回発掘中における碑文の発見について。
- de Menasce, Jean: *Récit préliminaire de l'inscription kouchane récemment découverte à Surkh Kotal. XXIV. OC* (München 1957), Akten (Ib. 1959), p. 488. Maricq, André: *La grande inscription de Kanīška et l'éto-tokharien, l'ancienne langue de la Bactriane*. JA 1959, p. 345-440.
- do.: *Bactrien ou éto-tokharien*. JA 1960, p. 161-166.
- Henning, W.B.: *The Bactrian inscription. BSOAS* 23 (1960), p. 47-55.
- Humbach, Helmut: *Der iranische Mithra als daiva*. Fs. Lommel (Wiesbaden 1960), p. 75-79.
- do.: *Die Kanīška-Inschrift von Surkh Kotal. Ein Zeugnis des jüngeren Mithraismus aus Iran*. Wiesbaden 1960.
- Cf. F. Attheim DLZ 82 (1961), col. 883-8.—O.K. *Kīma Arch. Or. (Praha)* 29 (1961), p. 694-6.—R.
- N. Frye III 5 (1962), p. 242-5.—M. Mayrhofer: *Das Bemühen um die Surkh-Kotal-Inschrift. ZDMG* 112(1962), p. 325-344.—I. Gershevich BSOAS 26 (1963), p. 193-6.—Contra Gershevich et Mayrhofer v. H. Humbach: *Baktrische Phantasmagorie*. [Mainz 1963.]
- do.: *Zur Titulatur der Kušan. ZDMG* 111 (1961), p. 400-402. Cf. Kušan u. Hephth. (v. infra), p. 7-11.
- do.: *Die Götternamen der Kušan-Münzen. ZDMG* 111 (1961), p. 475-479. Cf. Kušan u. Hephth. (v. infra), p. 18-25.
- do.: *Kušān und Hephthaliten. MSS Beineft C, München* 1961.
- do.: *Skythische Sprachdenkmäler in griechischer Schrift. II. Fachtagung für idg. u. allgem. Sprachwiss. Innsbruck* 1962, p. 123-128.
- do.: *Die neugefundenen Versionen der Kanīška-Inschrift von Surkh-Kotal. WZKSO* 6 (1962), p. 40-43.
- do.: *Ein baktrischer Titel bei Curtius Rufus. WZKSO* 6 (1962), p. 44-46.
- do.: *Nokonzoko und Surkh-Kotal. Ein moderner*

Mythos. WZKSO 7 (1963), p. 13-19.

Benveniste, E.: Inscriptions de Bactriane. JA 1961, p. 113-152. Cf. CRAI 1961, p. 210.

Brandenstein, Wilhelm: Kušānisch *βαρρο*. III 5 (1962), p. 233-236.

Altheim, Franz und Stehl, Ruth: Geschichte der Hunnen V (Berlin 1962), p. 3-25 = I. Kap. Retraktionen.

1. Zeit und Sprache Kaniška's

Hansen, Olaf: Zur Sprache der Inschrift von Surŕ Kotal. Fs. Morgensterne (Wiesbaden 1964), p. 89-94.

Göbl, Robert: Die drei Versionen der Kaniška-Inschrift von Surkh Kotal. Wien 1965.

本書のほか参考すべき主要な論著は、M. Mayrhofer ZDMG 112 (1962), p. 343-4 に挙げられている。その後のものとしては、Zwei neue Termini für ein zentrales Datum der alten Geschichte Mittelasiens, das Jahr 1 des Kušan Königs Kaniška. (sterreich. AW phil.-histor. Kl., 101. Jg. 1964, So. 7 がある。

二 問題点

1 碑文の言語および名称。碑文の言語が中期イラン語の

一種であることは Humbach を除く限り ほぼ定説である。一方 Maricq JA 1958, p. 395-413; 1960, p. 161-6)° Henning のイラン語区別は、この種の問題については、その民族と関係して、"The language of the inscription occupies an intermediary position between Pashito and Yidgha-Munji on the one hand, Sogdian, Khwarezmian, and Parthian on the other: it is thus in its natural and rightful place in Bactria." (BSOAS 23, 1960, p. 47) と述べられている。この点に関しては、大村と森下は賛意を表した。 (Die Kan.-Inschrift, 1960, § 188)° 後述のように、その民族を公たしては、いふ。

名称の問題については、Léon-tokharien' など三つの呼称が多々、イラン名は 'Bactrian' (BSOAS 23, 1960, p. 47-48)° トンズクは 'kušanisch' (Die Kan.-Inschrift, 1960, § 15, cf. O. Hansen Fs. Morgensterne, 1964, p. 89)° O. Klima は 'Kuschanobakttrisch' (Arch. Or. 29, 1961, p. 694 cum n. 1)° 同様に Mayrhofer は 'Kušānbakttrisch' (ZDMG 112, 1962, p. 326-7)° Göbl は文字どおり 'grākobakttrisch' (Iranica Antiqua I, 1961, p. 97, n. 1) を提唱して、"また定説がなう。

なるトンは、碑文の文章を韻文として解釈してゐるが、

(Die Kan.-Inschrift, 1960, §3, Skyth. Denkmäler 1962, p. 126) 一般には散文と見なされてはいる (cf. e.g. O. Klima Arch. Or. 29, 1961, p. 696)。ただし Göbl は韻文の可能性を認めている (Die drei Versionen, 1965, p. 24 int.)。

注1 特々 Die Kan.-Inschrift, 1960, §13: ein altiran. Dialekt; ib. p. 54: §199. Cf. Kušan u. Hephth., 1961, p. 18, ZDMG 111 (1961), p. 476, Skyth. Sprachdenkmäler, 1962, p. 125. なおまた松村の意見によれば Meyerhofer ZDMG 112 (1962), p. 330-331, O. Hansen Fs. Morgensterne (1964), p. 89 参照。

注1 Kušan u. Hephth., 1961, p. 18-20: Diaktoleogeographische Einordnung. (Hepthaliten の言語と語彙) ib. p. 27-43 参照) ZDMG 111 (1961), p. 475-7, Skyth. Denkmäler 1962, p. 125.

注11 贊成神によれば F. Altheim DLZ 82(1961), col. 888, F. Altheim-R. Stiehl: Die Gesch. der Hunnen V (1962), p. 15-20.

注12 'bakttrisch' の賛成する人は一層明確にするために 'kušānbakttrisch' とするべきであろう (Kušan u. Hephth., 1961, p. 19, ZDMG 111, 1961, p. 476)。

批評と紹介 注

2 内容。未知の中期イラン語で書かれた碑文の内容はいまだ十分に解明されていない。神殿の構築ならびに修復を

主題と見ら Maricq—Henning—Benveniste の解釈と (大意によれば Henning BSOAS 23, 1960, p. 48, Benveniste JA 1961, p. 116-7 参照) Kaniska = Mithra のための神聖供養の祭儀に関するものと云う Humbach の見解とが対立する。学界の大勢は前説に傾き、この方向に従って細語の究明を怠るはらず。O. Hansen が碑文の口語を一層明確に裏付けようとして 'Am Neumondstage des Regierungsjahres 31, im Monat Nisān', i. e. am 1. Nisān と解釈したのを一例とする (Fs. Morgensterne, 1964, p. 92-94)。ニンメンの一貫した努力とニンメン語学における造詣と対しては敬意を惜しまないが、リカシタマ碑文の発見以前から、ニンメンの提示した説明 *BATOLAITO* = Baghān (BSOAS 18, 1956, p. 366-7, cf. Maricq JA 1958, p. 430-431) を放棄して、それを 'göttliche Fähigkeiten besitzen' (Die Kan.-Inschrift, 1960, §21 'Kušan u. Hephth., 1961, p. 15-17) と解するようにな不安を感じた (cf. e.g. Frye IJ 5, 1962, p. 243-4)。

注13 ニンメンの解釈の基礎をなしている (Die Kan.-Inschrift, 1960, 特々 §199, 全文の翻記を) 同書巻末

の Übersichtsstafel に載せらるる)。Cf. Fs. Lommel (1960), p. 75-79, Kusān u. Hephth., 1961, p. 24-25, ZDMG 111 (1961), p. 479; Göbl: Die drei Versionen, 1965, p. 24, n. 31.

③ 神殿の目的。Schlumberger は聖火の神殿 (pyraethée 'un temple du Feu') と訳せらるる (JA 1952, p. 451-2; 1954, p. 174-5, p. 180-181, p. 186-7; Arts asiat. I (1954), p. 135; etc.)。Maricq は王権神代史の神鏡 ('un sanctuaire dynastique') と訳せらるる (JA 1958, p. 368-372)。またこの句の直訳は必ずしも木盾や木と融合を意味せ (cf. Humbach: Die Kan.-Inscription, 1960, p. 52-53, Göbl: Die drei Versionen, 1965, p. 24, n. 31)。

4 モノグラム。碑文の末尾にある二個のモノグラムの解釈は一定してゐない。フンクンはこれに重要な意義を賦予せしむる (Fs. Lommel, 1960, p. 75-76, Die Kan.-Inscription, 1960, § 4, § 160-161, Kusān u. Hephth., 1961, p. 24, ZDMG 111 (1961), p. 479 cum n. 3; cf. Göbl: Die drei Versionen, 1965, § 18 (v. supra))。

5 年代。碑文自身の挙げる第三十一年が、いわゆるカニ

シツカ紀元によるものとして、この年代が王の生存中のものか否かについて、学者の意見は一致しない。クシヤーナ朝貨幣の研究の結果、一般に信じられてゐるカニシツカ紀元この年代はインヴェシツカの治に属し、カニシツカ一世はすでに世にならざることを教えてゐる。しかしマリクは特別の仮説を設け、当時カニシツカはなお故地バンクトリアにあって支配を続かつたこと主張する (JA 1958, p. 384-5. *pro*: K. Jettmar CAJ 5 (1959), p. 204. *contra*: Humbach: Die Kan.-Inscription, 1960, § 196-198, Henning BSOAS 23 (1960), p. 48, p. 55, Benveniste JA 1961, p. 114)。またマリクは、この年代について独特の見解をもち、ティールが、本碑文の年代を 260/61 年に決定し、王の存命中のものとする (Die drei Versionen, 1965, § 36)。本書の紹介中に添へ、A. D. H. Bivar の説を採記した (上記一二三頁参照)。このほか F. Altheim は、カニシツカを神殿の建立者と見ず、ただその名を与えたものと考え、碑文中の年数は西紀前三一年に始まるかわゆるアレキサンダー紀元によるものと主張し、31 = (5) 31 となるもの (西紀 219/220 年) と推定してゐる (DLZ 82, 1961, col. 886-7, F. Altheim-R. Stiehl: Gesch. der Hunnen V, 1962, p. 7-9)。

6 結語。以上の問題点につき、研究者はおのおのその立

場を明らかにしなければならぬ。イラン学の専門家でなくとも、また積極的に新しい見解を提示し得なくとも、諸説を批判的に比較して、可能性の多少を判断することはできる。評者は碑文の言語を一種の中期イラン語と認め、内容については Henning-Benveniste によつて推進された方向に賛成するが、三原文相互の関係を満足に解決する説はいまだ見いだされない。また神殿の最初の建立者はカニシュカであるとしても、碑文中の年数は恐らくフヴィシユカの治世を指すものと考ええる。

前号 (第四十八卷) 目次

論説

ダヤン・ハガンの年代 (上)

岡田英弘

袁世凱の總統就任

藤岡喜久男

東洋的古代 (下)

宮崎市定

資料紹介

太平天国東王楊秀清の誥諭一篇

佐々木正哉

批評と紹介

エンダコット著 初期香港関係人物略伝

佐々木正哉

坂野正高著 中国と西洋 (一八五八—一八六〇) — 総理

衙門の創設・徐中約著 中国の国際関係 (一八五八—

一八八〇) ・蒙思明著 総理衙門の組織と機能

明石陽至

韓国史学会編 申寅鎬博士華甲記念朝鮮時代研究特輯

宮原兔一

アンワル・カン著 イギリス・ロシア・中央アジア—

一八五七—一八七八年の外交— 佐口透

トルコ言語協会編 言語における「純粹化の限界」

護雅夫